

※答えはすべて解答欄に記入すること

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えよ。

「池谷、佐々木（味津三）、直木^{注1}など、親しい連中が相次いで死んだ。身辺^{注2}うたたコウリヨウたる思いである。直木を記念するために、社で直木賞金というようなものを制定し、大衆文芸の新進作家に贈ろうかと思っている」

故菊池寛は、直木の死んだ直後『文芸春秋』四月号（昭和九年）中の「話の屑籠^{くずかご}」にこうした思いつきを発表した。

^{注3}爾来^{じらい}早や、二十五年を経た今日、その制定によって、毎年新進大衆文芸作家を世に送り出し、すでにことし前半期の受賞者池波正太郎氏を加えて、四十数人に達した。

しかし「i」は、このように花々しく、迎えられても、記念される当のii

の名と作品は、ともすれば忘れられ勝ちである。

かつて故人は、当時築地木挽町^{つきじこびきちよう}にあった、文春クラブの二階で、私に、

「ボクのものなど、死んでしまったら、果たして何年くらい読まれるかな、キツとすぐ忘れられてしまうだろう……」

とあの長い顎^{あご}をなでて、ボッン^{注4}といったことがあった。私にはいま、その言葉が強く

思い出される。

遺憾ながらその言葉は、当^{あた}っているようでもある。でも『南国太平記』は、いまもなお新しく版を重ねている事実もある。

直木賞選考委員の一人の大佛次郎氏が、過日、本年度前半期の選考にノゾ^イむに際して、たまたま直木氏が、死の前に、晩年の仕事場として建てた、横浜市金沢区富岡の家を明らかにしたいといったのが動機で、地元の横浜ペンクラブがその宅^{注5}趾^{たくし}を顕彰することに、直木氏と親しく、かつ「直木賞」選考委員でもある吉川英治、川口松太郎などの諸氏に、横浜市、商工会議所、神奈川県、その他有志によって「直木三十五宅趾記念事業委員会」が結成された。

そして、宅趾には記念碑を、付近の墓所のある長昌寺^{ちやうしょうじ}と、最初にホウム^ウった慶珊寺^{けいさんじ}の前には標石を建てる運びとなった。

きたる十月六日には、その除幕式を行い、続いて七日には、横浜市音楽堂で、文芸春秋新社の後援のもとに、記念文芸講演会が開かれることになった。

碑は縦一メートル三、横二メートル九の仙台石と、大谷石の白と黒との直木好みの色で取り合わせ、横浜美術懇話会の吉原慎一郎氏が設計した。その碑面の右には、「芸術は短く、貧乏は長し」と刻まれることになり、文芸春秋社長の佐佐木茂索氏が、その字^{きじ}を揮毫する。その句は、直木氏の随筆集中の一戯^{注6}語からとった。

^A「直木らしくてよからう」と委員会では期せずして、あえてこのような戯語を撰んだ。

「僕は、僕の母の胎内（へそ）にいる時、お臍（へそ）の穴から、僕の生れる家（うま）のなかを覗（のぞ）いて見て、

“こいつはいけねえ”

と思った。頭の禿（は）げかかった親爺（おやじ）と、それに相当した婆（ばばあ）とが、薄暗くて小汚（こご）くて、恐ろしく小さい家の中に座っているのである。だが神様から、ここに生れ出ると、いわれたのだから“仕方がねえや”と覚悟したが、その時から、貧乏には慣れている……”とかつて直木氏は、好んで書いた貧乏の話の一部に書いている。

そして昭和九年二月二十六日、四十三才で病没するまで、借金と税金に責められとおした。しかし一面では貧乏をまた樂しとさえもした。

「紙屑（かみくず）みたいな物が、一万五千元（当時の）の金になった」と喜び、書きおろし全集の印税がはいると、三千元で家を、四千元で月賦の土地を、三千三百円注7でモリス自動車を買

って、残り僅（わず）かとなり「金持（かねもち）になって、不愉快な話」とも書く a でもあった。

「身体が悪いし、悪いから、もっと働きたいので、坪三銭という土地をかりて、五十坪足らずの家を建てかけた、^{注8}“日日”（本紙のこと）と“朝日”とを書いているので、そのどつちか一つで、建つと考えたからである。所（ところ）が、九月などは流行の赤字で、大工から困りましたなア、といわれた。

外から見ると、これだけ書けば、いくら僕でも、五十坪五千元位の家は、訳なく建つだ

ろうと——それは大いに尤もである。しかし“

b

”という、その前提が

大いに間違いである……”

と、死の数カ月前に「家が建たん」という随筆で彼はこんなふう^エにタ^エンじてもいる。

また「五間^{けん}で狭いから、山の上に、もう一つ、私の本当の書斎を建てるつもりで、設計をしておいたが、この硝子窓^{がらす}の窓ワクだけが、何^なんと意地悪く出来上^{あが}ってきた。建築上、ステール、サッシという名の、ショーウインドウの硝子をそれにはめて、所謂^{いわゆる}ドライコンストラクションという最新様式の建築であるが……”

などと「家の事」のなかにも書き「このワクが千二百円。口惜しいから、門の代^{かわ}りに、山の下から上まで、このワクを建て、

“どうだ、家は小さいが門だけは八つもあるぞ”

と、一つの門を、菊池寛に名をつけて貰^{もら}って“この門を潜^{くぐ}ると、金ができる”次の門を潜ると“女が惚^ほれる”久米の門は“家庭円満”総称して“^{注9}八門遁甲^{注10}”^{注9}はちもんとうこう^{注10}しよかつこうめい諸葛孔明の陣構え

みたいなものだ。

書いていると面白いが、建^{みこみ}つ見込もない洋館の窓ワクだけができ上ってきたなどとは、相^{ゆうつ}当に憂鬱^{ゆううつ}なものだ……”と自らふざけても書いた。

死の直後、故菊池寛は「直木は富岡の家を建てなければ、死んだ時に借金はなかったんだ。とにかく書きおろし全集ではいった金は、全部富岡の家に入れ上げたんだ。一万三千

円半年で注ぎ込んでいる。いま売るとなるとあんな変な家だから三千円にも売れないよ」
と富岡の家を語っている。ロクな値に売れないだろうというわけは——押入おし入れがなく、玄関がないというおかしな家であったからである。

そのころ直木氏は、笹本寅や、故菅忠雄に「病気が注11（せきずいカリエス）進んで原稿生
活ができなくなっただけから、二年くらい生きなくちゃならないので、その間はいるつもり
でこしらえた家だ」ともいい「いまから書けなくなつて、三カ月たてば、施療患者になる
よりほかはない。短編の筋をいま考えているが、その筋は、いよいよ書けなくなり、仕方
がないから、銀座街頭で一日、十人づつずつにお辞儀する、そして友だちになつて家にきても
らい、お茶を一ぱい出す、それを一月やると、自分が死んだ時オ、コウデンに一人から十円
づつもらう、そうすると、三千円できるから、これで、子供が学校を出るまでの金ができ
る。どうだい、こんな筋……」

などとも語った。四十三年の生涯を、貧乏で終始した直木氏晩年の、富岡の家は、その
終編であり、体当たりで描いた彼自身じしんの力注12カリカチュアでもある。

ギリシヤギリシヤのヒポクラテス注13の名句をもじつた彼の戯語は、彼の全生涯を物語る結語のよう
でもある。それには自ちようとシニカルなニヒル的精神ばかりでなく、その底には金の世
の中に対する鋭い批判を私は感じとる。そのゆえにこの一語は、直木の宅趾の碑に刻まれ
ても不当でないと思う。

今日の流行作家から見たら、おかしいような話だ。

また直木さんについて思い出すのは、私が新聞社をやめ、筆一本で独立を志した時、故
浜本浩君も改造社をやめ、共に出発することにした。その時、二人は親しくして貰った直
木さんに、木挽町にあった文春クラブの二階で、

「実は二人共決心はしたものの不安なんです……」と、二、三の先輩にいったのと同じ
ようなことの伺いを立てたら、直木さんは言下に、

「そりや努力次第だ」とポツリと喋ってくれた。その後浜本君は大いに努力の甲斐あつ
て、先づ名作『浅草の灯』以来めきめきと目覚ましい仕事をしたが、私は廻り道をした
り、怠けたりして、現状に至っている。

今度、横浜市金沢区富岡の地に直木さんは晩年の労作の場所にと撰んだ土地に建てた家
の跡が、僅か三カ月で碌に住みつきもしないで他界してしまった。その宅趾に大佛さんの
呼びかけで、横浜ペンクラブの人々と、偶然横浜に住みついた私も御手伝して、記念碑を
建てることになった。

来る十月六日に建碑式を行う。これは県、市、商工会議所を始め、地元の有志の協力
と、大佛、吉川、長谷川（伸）、川口松太郎の諸氏の積極的な支援で、直木三十五遺蹟記
念事業委員会を組織し、文壇その他の御寄附で、この運びとなった。碑は前記の通りであ
るが、碑面の文字「芸術は短し、貧乏は長し」という直木さんの残した言葉を、碑前頒布

し、残部は有隣堂から発売することにした。

その編集を担当した私は、直木さんの書いたものを読み返していると随筆のなかに、

「平野零児、浜本浩、海音寺潮五郎、木村哲二等々今年は多くの新人が出てきたが、この及落は来年が決定する云々」私は既に直木さんのいう「来年」で、cと決定していたものであったということを、今更悔いている。

建碑のことを書いた序が、つい私の愚痴に終ったが、これを機会に、直木さんのいった

「d」することを遅まきながら決意したい。

（平野零児『芸術は短く貧乏は長し』による）

（注）

1 直木——なおきさんじゅう直木三十五（1891—1934）。大阪市出身の小説家。大衆文学の歴史を変えた功績により、没後、その名を冠した「直木三十五賞（直木賞）」が設けられた。

2 うたた——ますます。

3 爾来——それ以来。

4 ポツと——「ポツと」のこと。

5 宅趾——住居の跡。

6 戯語——戯れたりからかったりする言葉。

7 モリス自動車——イギリスの自動車メーカー「モリス」製の車。

8 日日——東京日日新聞。

9 八門遁甲——出陣の際に行われた占術。

10 諸葛孔明——中国、三国時代の政治家、軍師。

11 せきずいカリエス——「脊椎カリエス」のこと。

12 カリカチュア——対象の特徴を誇張しながら、滑稽、ユーモア、風刺などの効果をねらった絵。

13 ヒポクラテス——古代ギリシャの医師。

問 1 傍線部アゝオのカタカナを漢字に直せ。

問 2

i と ii

に入れるのに最も適当な組み合わせを次のアゝオの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア i 直木賞 ii 直木三十五

イ i 文芸春秋 ii 直木三十五

ウ i 直木三十五 ii 直木賞

エ i 直木三十五 ii 文芸春秋

オ i 直木賞 ii 文芸春秋

問 3

傍線部 A 「直木らしくてよからう」とあるが、直木らしさを示す言葉として不適当なものを次のアゝオの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自虐

イ コンプレックス

ウ 皮肉

エ ユーモア

オ 風刺

問 4

a

に入れるのに最も適当なものを次のアゝオの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 資産家

イ 浪費家

ウ 不平家

エ 投資家

オ 儉約家

問 5

b

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、

記号で答えよ。

ア 外から見てみる

イ あれだけ多く書けば

ウ いくら自分でも

エ 五十坪の家

オ 五千円の家

問 6

傍線部 B 「彼の全生涯を物語る」とあるが、直木三十五の生涯を端的に表した言葉を文章中から十字以内で抜き出せ。

問 7

傍線部 C 「この一語」とは何か。具体的に書かれたものを本文中から抜き出せ。

問 8

傍線部 D 「筆一本で」、傍線部 E 「言下に」、傍線部 F 「文壇」の意味を書け。

問 9

c

に入れるのに適当な言葉を漢字二字で書け。

問 10

d

に入れるのに適当な言葉を文章中から漢字二字で抜き出せ。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

毛筆なのに英文。格言なのに輕妙^ア。〈Haste not, Rest not〉。急ぐな、

休むな。盛岡市先人記念館に入ると、新渡戸稲造^{にとべいなぞう}の扁額^{へんがく}が目飛び込む。生誕160年を記

念した遺品展だ▼その人生をたどると多彩な活躍に圧倒される。英語で『武士道』^イを著し、

国際連盟の初代事務次長に。東京女子大の初代学長として女性教育にも情熱を注ぐ。昭和の

末から平成にかけ、5千円札の a を務めた▼隣にはもう一つ扁額があった。〈Has

te not & Rest more〉。こちらは一転、「もつと休め」と諭^ウす。「弟子に向け

たもので、 b まなざしが伝わってきます」と主任学芸員の中浜聖美さん^{さとみ}（43）は話す

▼ハンセン病治療で知られる精神科医の神谷美恵子の両親は、新渡戸の仲立ちで結婚した。

自宅にしばしば遊びに来ては、神谷のほおをつねってかわいがる新渡戸は「慈愛の深いおじ

いさま」だった▼^A長じて神谷は医師の目で新渡戸を分析する。「完全癖」が強すぎて、幾度

もうつ状態^エに陥っていた。「いかなる自力も太刀^オうちできない感情的な不安定さ」に取り付

かれ、療養を重ねた『存在の重み』。 c 盛夏のような人物だと思つて

いたが、 d 晩夏のような人だったのかもしれない▼〈太平洋の橋となら

ん〉。 e な理想を掲げ、「休むな」と自らを叱咤^{しった}しながらも、休まざるを得ない

もろさを自覚していた。だからこそ、日本と世界をつなぐ大きな橋となった。

（二〇二三年八月二七日付朝日新聞朝刊『天声人語』による）

問1 傍線部ア～オの漢字の読み仮名を書け。

問2 a に入れるのに適当な、身体の一部を表す言葉を書け。

問3 b に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 熱い
- イ 温かい
- ウ 真剣な
- エ 冷静な
- オ 冷淡な

問4 c に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 感情的に不安定な
- イ 人を寄せ付けない
- ウ 人の心に温^{ぬく}もりを与える
- エ 情熱のたぎる
- オ もはや燃え尽きつつある

問5

d

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、

記号で答えよ。

ア 慈愛の心にあふれる

イ すでに悟りの境地に達した

ウ 生きる気力さえ失ってしまった

エ 自身には厳しくも他人には優しい

オ 自らの弱さや寂しさを知る

問6

傍線部A「長じて」の意味を書け。

問7

e

に入れるのに最も適当な四字熟語を次のア～オの中から一つ選び、

記号で答えよ。

ア 清廉潔白

イ 前途洋々

ウ 気宇壮大

エ 天衣無縫

オ 品行方正